

ウィッカーマン

2007(平成19)年7月30日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本=ニール・ラビュート/出演=ニコラス・ケイジ/エレン・バースティン/ケイト・ビーハン/モリー・パーカー/ダイアン・デラーノ/リリー・ソビエスキー/エリカ=シェイ・ゲア (ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給/2006年アメリカ映画/101分)

……「wicker」とは「小枝で編んだ」という形容詞だから、ウィッカーマンとは……？ 舞台はワシントン州にあるという、蜜蜂のような女権社会の奇妙な小島。8年前に姿を消した婚約者からの手紙で、行方不明となった娘を探し出してほしいという依頼を受けた白バイ警官に扮するニコラス・ケイジは……？ 今ドキ珍しい因習の「到達点」が収穫祭での生贄だが、チラシに躍る「驚愕のラストシーン!!」とは一体ナニ……？ そんな視点でこの映画を楽しんでみては……？

イギリスの1973年版 vs. ハリウッドの2006年版

私は全然知らなかったが、ニコラス・ケイジ主演のハリウッド版『ウィッカーマン』は、1973年製作のカルト映画として名高いイギリスの同名映画(監督ロビン・ハーディ、出演クリストファー・リー)のリ・イマジネーション作品とのこと。その両者を比較したのが、プレスシートにある鷲巣義明氏(映画文筆家)の「ニコラス・ケイジが挑んだ、新たな『ウィッカーマン』の世界!!」だが、73年版は「70年前後の時代性=反キリスト主義、或いは反キリスト的教えを投影させた、エロティシズム漂う異界ホラーとして年々カルト人気を得ていった」とのこと。しかし33年後の今、「全裸の女性たちが青空の下で舞い踊ったり、全裸美女が夜中に誘惑ダンスをしてみたり、はたまたケルト楽器で奇異なフォークを奏でたり」しても、「既に時代はフリーセックスに驚く時代でもなくなったのだから」、そのリ・イマジネーションは難しいはず。

そこで、この企画をニコラス・ケイジに積極的に働きかけた監督・脚本を務めたニール・ラビュートは、ワシントン州にある個人所有の小さな島サマーズアイル島をこの映画の舞台に……。さあ、カリフォルニア州の白バイ警官である主人公エドワード・メイラス（ニコラス・ケイジ）が、この島を訪れたのは一体なぜ……。そして、そこで彼を待ち受けているカルト的世界とは一体ナニ……？

冒頭に提示されるテーマは……？

白バイに乗って交通違反のチェックをするのが、メイラスの毎日のお仕事。そんなメイラスは、前を走っている車の中から道路に人形が落とされたのを発見したため、それを拾ってサイレンを鳴らしたから、前の車はすぐに停止。乗っているのは運転している母親と後部座席に座っているかわいらしい女の子の2人。母親は「すみません」と謝っているものの、女の子の方はご機嫌が悪いとみえ、いったんメイラスから受け取った人形をまた道路に放り投げて捨ててしまうという行儀の悪さ……。

仕方なく、メイラスがその人形を再度拾おうと車を離れた途端、何と大型車がその車に激突し、車は炎上しはじめたから大変。メイラスは必死になって後部座席のガラスを割り、女の子を救い出そうとしたが、車は爆発してメイラスを吹っ飛ばしてしまった。これだけの大事故になれば新聞で大きく報道されるはずだが、奇妙なことに事故現場からは母娘の死体は発見されなかった。それは一体なぜ……。俺は夢を見ていたのか……。この一件以来、幻覚・幻聴のような症状に悩まされたメイラスだったが……？

この乗用車への大型車の激突シーンと、燃えあがる炎の中でじっとメイラスの目を見据える女の子のシーンは、再三スクリーン上に再現される。したがって、冒頭に描かれるこのシーンが、カルト映画であるこの映画のテーマ……？

あなたなら、どうする……？

つき合っていた恋人と別れることは誰でもよくあることだが、そんな場合、きっぱりと割り切れるのが女、いつまでもロマンティックにその陰を引きずるのが男と相場が決まっている……。幻覚・幻聴に悩み、仕事も休職状態となったメイラスの元に届いた一通の手紙は、婚約までしていながら8年前突然メイラスの前から姿を消してしまったウィロー（ケイト・ビーハン）からのもの。その内容は、自分は今故郷のサ

マーズアイル島で生活しているが、一人娘のローワン（エリカ＝シェイ・ゲア）が2週間前から行方不明になっているので、是非メイラスに助けに来てもらいたいというもの。

あのウィローが子供を生んでいたなんて……？ それにしても、今頃なぜ俺に……？ そんな疑問をもったメイラスは友人に相談を持ちかけたが、友人の答えは「そんなものは無視したらいい」というものだった。そりゃ、私と同じ相談を受けてもそう答えるに決まっている。だって、理由も言わないまま目の前から突然消えていった婚約者から、8年も経っていきなりそんなことを頼まれてもオーケーする必要なんてないのが当然だから……。あなただって、きっとそうだろう。ところがメイラスは……？

ニコラス・ケイジの他は女性ばかり……

この映画のポイントは、シスター・サマーズアイル（エレン・バースティン）個人の所有であるというサマーズアイル島は完全に女権社会であり、男女の主従関係は島で大量に飼育している蜜蜂の社会にそっくりだということ。したがって、この映画には島に住む男も登場するが、彼らにはセリフは全くなし。ただ1人メイラスを水上機で島へ連れていくパイロットの男が少しセリフをしゃべるだけ。したがって、ニコラス・ケイジの他は出演者はすべて女性ばかり……。

主要な人物は、シスター・サマーズアイルの他、宿の主人シスター・ビーチ（ダイアン・デラーノ）、宿のメイドのシスター・ハニー（リリー・ソビエスキー）そして教師のシスター・ローズ（モリー・パーカー）らだが、彼女たちはそれぞれ何かいらく因縁がありそうな雰囲気……。

そんな中、メイラスが島に来てくれたことを喜び、きっと娘のローワンはこの島の中にいると、人目を忍んで打ち明けるウィローに対して、メイラスは必ずローワンを探し出すと約束し、直ちに行動を開始したが……。

収穫祭での儀式は……？

映画の中盤は、白バイ警官のメイラスがまるで刑事のように警察手帳を駆使しながら、ウィローの娘ローワンを探していく過程が描かれる。もっとも、メイラスがいくら警察手帳を示しても彼はカリフォルニア州の白バイ警官だから、ホントはワシントン州

にあるこの島における搜索権限も逮捕権限もないはず……。したがって、「逮捕するぞ！」といくら大声でわめいても、腹の据わったシスターたちには全然こたえていないのはもの悲しい限り……？

自給自足システムのこの島は古風な農耕社会を形成していたが、そんな場合、豊作を願ったり祝ったりする儀式があるのはどこも同じ。しかして、日に日に近づいてくる収穫祭の儀式では生贄が捧げられるらしいと聞いたメイラスは、ローワンがその生贄に供されるのではと直感！ したがって、ローワンの救出は急を要することに……。そのうえ、捜査を続けていく中、驚くべきことにこのローワンはメイラスの娘であるとウィローから告白されたから、メイラスの必死さはさらに増していくことに……。しかして、ウィッカーマンとは一体ナニ……？

ウィッカーマンとは……？

この映画のタイトル『ウィッカーマン』とは一体何のこと……。英語の達人な人はわかるだろうが、普通の日本人にはちょっとムリ……。そこで辞書を調べてみると、形容詞の「wicker」とは、①小枝でつくった、②枝編み細工でおおったという意味。すると『ウィッカーマン』とは……？

なぜそんなタイトルがついてるのかを意識しながら映画を観ていけば、終盤になって「ああ、なるほど」と思い至るはず……。さて、メイラスは無事ローワンを救い出すことができるのだろうか……？

驚愕のラストシーンを目撃せよ！

この映画のチラシには、「危機、また危機！ ニコラス・ケイジ絶体絶命!!」そして「驚愕のラストシーンを目撃せよー」という文字が躍っている。ウィローの娘であり、同時に自分の娘でもあると知ったローワンを探し出し、救い出すこと。それがメイラスに与えられた警察官としての任務であり、ウィローの元婚約者そしてローワンの父親としての義務だったが、島民たちは基本的に敵ばかり……？

そんな中、やっとローワンを見つけ出したメイラスは、ウィローと共に決死の行動を開始したが。そして、映画は驚愕のラストシーンへ……。しかし、それをここで書けないのは当然。それは、しっかりとあなた自身の目で……。

2007(平成19)年7月31日記